

明治期の翻訳と昔話

— 『漁師とその妻』 あるいは 『金の魚』 —

久保 華誉

はじめに

『川越地方昔話集』の原稿には「グリム? コノ話多シ理由アルカ或ハ日本ノ話カ」と柳田國男により朱書きされ、昔話集に入らなかった話がある。グリム童話では「漁師とその妻」(KHM一九)という話だ。この「よくばり損」を載せた野村純一編『柳田國男未採扱昔話聚稿』¹⁾の中で編者は、外来種²⁾を「ひとたびはそれを峻別し、きちんと一線を画した上で、改めて位置づけるべきだと考えた」柳田を肯定しつつも「この島国においては外来のどの種の話をやすやすと受け入れ、またその一方ではいかなる話を排斥して行ったのか、客観的にはそうした昔話の受容と享受といった事績を知る上でも『グリム? コノ話多シ理由アルカ』の『理由』そのものに向けては、もうそろそろ責任をもって応える時期が来ているのではなからうか」とも述べている。

この話の受容をめぐっては、大島廣志「近代における外国昔話の受容」²⁾で既に論じられている。しかし、今回は比較する明治期の翻訳もグリムに留めず、また口承資料も更に増やし、両者の内容を詳細に検討しながら、柳田の疑問でもある日本への受容に関して考察したい。外来種とみなされて排除されてきたと推測される話の価値を見直したいと思う。それでは、まず原典、明治時代からの翻訳、そして日本の口承資料を見てゆきたい。

第一節 「漁師とその妻(金の魚)」とはどのような話か

アールネ&トンブソンの『昔話の型』を改訂したウターの『国際昔話の型』では五五五番の話であり、分りやすいように四つの小見出しをつけながら訳した³⁾。

I. 救助 貧しく年老いた漁師が超自然的な存在(魔法にか
けられた魚、その他の動物、聖なる存在、聖人、鬼、動物

の形をした人」を窮地（死の危険、拘束、変身）から救う。もしくは、漁師は魚を水に戻す。

Ⅱ. 報恩 そのお返しに、魔法的な存在は、彼（とその妻）の願いを叶えることを約束する。

Ⅲ. 欲望の行方 始め、彼らは節度ある利を得ていたが、次第に妻の要求は、度を越したものになってゆく。（例えば、彼らは貴族、王、遂には神になりたいと望む）

Ⅳ. 元のもくあみ 魚（精霊）は、与えたものを取り消し、夫婦は以前の貧しい生活に戻る、もしくは罰を受ける（動物への変身）。

グリムでは次のような話になっている。

漁師は、大きなひらめに魔法にかけられた王子なので助けて欲しいと言われ、放してやる。しかし、妻のイルゼビルに何故小さな家でも頼まなかったのかと責められる。いやいや漁師がひらめに頼みに行くと、海は緑色と黄色になっているが、頼みを聞いてくれる。その後、妻は石の城、王様、皇帝、法王を望み、最後に日と月を支配する神様になりたいと言いつ出す。願うに行く度に海の色は悪くなっていったが、今では海は荒れていて漁師の声も聞こえない。ひらめは、「帰ってごらん。元の小屋の前に腰掛けているよ。」と答え、二人はいまでも小屋の前に座っているという。

この話は「ねずの木の話」（KHM四七）とともに、オットー・ルンゲ（Philipp Otto Runge, 1777—1810）が生まれ故郷のボンメ

ルン方言で採話したのをグリム兄弟が童話集に収めた。ルンゲは画家であり、この話の中でも要求がエスカレートすることに空や海が荒れ模様になってゆく様子を色彩豊かに描写している。グリムの場合、願いは六つであるが、小さい家と石の城、王様と皇帝、法王と日と月を支配する神様というそれぞれ、家、世俗権力、宗教的権力の三つにまとめられる⁽⁴⁾。

更にグリムに影響されて、プーシキン（Александр Сергеевич Пушкин, 1799—1837）が「金の魚」を韻文で綴る。ロシアの子どもたちもリズムカルに朗誦するという作品だ。またロシアの昔話「十二の月」も、グリムの「森の中の三人の小人」（KHM一三）と同じ話で、わが国では「継子の苺摘み」として語られている⁽⁵⁾。ロシアの昔話と共通している二話の話は、国境を越えて共感しやすい話と言えるだろう。以下に梗概を示したい。

貧しいお爺さんが海で網を投げると、三度目に金の魚がかかり、なんでも好きなものをあげるといふ。お爺さんは、お礼はいらないと魚を海に戻す。お婆さんは、洗い桶くらい貰えと文句を言う。金の魚に頼むとその通りになる。お婆さんは、新しい家、古い家柄の貴族、女王、最後に海の女王になりたいたいと言いつ出す。お爺さんが海に行く度に悪くなっていった天候も遂に黒い嵐となり荒れ狂っている。願いを金の魚に伝えると、金の魚は何も言わず、「しっほで 波をビシャンと叩くと しぶきをあげて 深い海へと消えていきました⁽⁶⁾」。お爺さんが、家に戻るともとの小屋に戻っており、壊れた洗い桶

がころがつている。

欲望の行方は、洗い桶、レンガ造りの新しい家、貴族、女王、海の女王、とエスカレートしてゆく。グリムと同様に、徐々に荒れてゆく海の描写がある。またお爺さんは、お婆さんが貴族になると馬小屋で働かせられ、女王になると、宮殿から追い出されるといふ酷い扱いを受けているのも特徴的だ。風刺が効いた作品になっている。

第二節 明治期の翻訳を中心に

それでは具体的な翻訳の例を上げる前に、こういったお伽噺がどのように受け入れられていたのか明治時代の状況をまとめてみたい。⁽⁷⁾

明治時代には子ども向けの雑誌が刊行されたが、主なものに「少年世界」がある。この雑誌は、巖谷小波(1870—1933)の主筆で明治二十八(一八九五)年に博文館より刊行された。明治四十年の「少年世界」の増刊号「お伽共進会⁽⁸⁾」では、「懸賞お伽噺」という特集が組まれている。これは、読者からお伽噺を募集して賞を与えるという企画であった。ここに、芳賀矢一の批評が次のように掲載されている。「今回のお伽噺審査について、余の感じたことは、その西洋種の非常に多いことである。否すべての話の構造が西洋であることである。巖谷君の「世界お伽噺」というものが殆どお伽噺の標準となつて、巖谷君のお伽噺か、

お伽噺の巖谷君が分からなくなつてゐる様な形勢であるから、世間一般にお伽噺といへばまず巖谷君の「世界お伽噺」であろう。(中略)すべてがゼルマン式で、巖谷式で、実は採点の標準にも苦しんだのである。余は明治のお伽噺は早く巖谷君の勢力の下に存在するものであることを悟つた。これは一方に於て将来の文学のために賀すべきと同時に、一方で日本に於けるグリム兄弟の事業の益々大切である事を悟つた」。

また、懸賞ハガキお伽噺が催されている。原稿募集は大正七年の一月号で行われた「原稿は、自分で新しく作つたお伽噺に限る」と書かれ⁽⁹⁾、十月号で結果発表されている。小波が選者となっているが、入賞している作品に「星のお金」という作品がある。大阪の渡邊漁舟による次のような作品だ。

孝行者の孝三は今日も夜おそく迄町へ薪を売りに行つて帰つて来るのでした。すると向うから一人の老人が歩いて来たが孝三の前でハタと止まつて、「お、孝三、わしはお前の孝行に感じてほうびをやりに来たのぢや」と云ふかと思つと、老人は手を二つ打つた。とアラ不思議や今まで光つてゐた星が皆金貨に変つて、孝三の前へバラバラ落ちた。「孝三早く之を家へ持帰つて母を喜ばせよ」といつて老人は消えてしまつた。孝三は大層喜んで金貨を集めて持つて帰つた。空には無い筈の無数の星が光つてゐた。

この話は、グリム童話の「星の銀貨」(KHM一五三)を元にしてゐると考えられる。貧しいが心の優しい少女が、出会う

人たちに乞われるままに食べ物から着るものまで与えてしまう。すると最後に星が銀貨になって少女に降ってくるという話だ。この話を小波は、「星娘」と題して、「少年世界」に明治二十九年に掲載している。この話が、受容されて「星のお金」になったと考えられる。その他イソップ「蟻と鳩」の話「兎と亀」の後日談などが選ばれている。こういったグリムやイソップという外国の話を元にした話が応募され掲載されている。

また当時ヘルバルト教育主義が日本にも入ってきたことも大きな関わりがある。この教育法は、修身教育にグリム童話などメルヒエンを取り入れることが有効と考えられ、日本でもそれは実践された。既に野口芳子「グリムのメルヒエン その夢と現実」¹¹、中山淳子「狼と七匹の子山羊」の謎¹²、須田康之「グリム童話（受容）の社会学」¹³、奈倉洋子「日本の近代化とグリム童話」¹⁴などで言及されている。拙稿「日本における『豆と藁と炭』の旅」¹⁵で述べたように、子どもの教育にお伽噺を積極的に利用したヘルバルト主義は日本の昔話に影響を与えたと考えられる。こういった状況の中で、具体的に明治期の翻訳の例を見ながら紹介したい。

まず、話の内容で大きく三つに分ける。Ⅰ. グリムの「漁師とその妻」、Ⅱ. プーシキンの「金の魚」と思われる話、そして金の魚が登場する話の前半が似ているⅢ. グリムの「金の子ども」(KHM八五)の翻訳をそれぞれ挙げよう。

Ⅰ. グリム「漁師とその妻」系

グリムの「漁師とその妻」を元にしたと考えられる翻訳は、四話ある。【あ】こすぎ訳「漁師の望み（お伽噺）」、「家庭の友」内外出版協会（第一巻第十一号）明治三十七年二月【い】橋本青雨訳「漁師の妻」『独逸童話集』大日本国民中学会、明治三十九年三月【う】巖谷小波「明治少女節用」博文館、明治四十年【え】木村小舟訳「漁師の妻」『教育お伽噺』博文館、明治四十一年十月、である。

【あ】は、漁師が瓶を開けてくれたお札に、魔物が願いを叶える。欲望の行方は、小さな藁葺きの家だったので、板葺きの家、さらに二階建てのレンガ造り、石造りの家、お城、最後には王様の大理石の御殿を願う。すると魔物は「幸福は家ではなく、住む人の気持だと知るがよい」と雲の中に消える。夫は「私達が先刻までの様な気持で居るなら、例へ大理石の御殿に住んでも次には黄金の宮に住みたいと、気を揉んだに違ひない。私達の幸福は二室の家にでも満足して、今まで通り働くのだ」妻も涙を拭いて「ホンに私が悪うござんした。翌日からは一生懸命に働きます」と言い、反省して終わる。特徴としては、望みは終始、家に関してのみで、はじめは魔物は漁師が礼を言ってきたのだと思いい「ニコニコして居りました」が、表情、話し方でだんだん不機嫌になる様が描かれ、巨大になってゆく。

【い】は、橋本青雨(1888-)の訳で、登場人物は、大きな魚(海の人)、漁夫、女房お六である。女房に名前がついている

のが特徴的だ。魚は魔法使いに呪われた王子だと話す。欲望の行方は、はじめ浜辺の洞穴だったので、小さくても家、十日後に煉瓦造りの家、一晩後に華族、皇后様、世界の王様、そして最後に、私の許しもなく勝手に登るのを見ると癪に障るからという理由で太陽と月を指図する主人。そして最後に「では、以前の洞穴にお帰りなさい」と言われて終わる。だんだん荒れる海の様子もその度に描かれている。また樋口勸次郎の「童話教授に就き」の付録がついている。

【う】の巖谷小波の訳であるが、本文の欄上に、「少女お伽噺」があり、「かくや姫」、「小野小町」などの話と共に「漁師の女房」が載せられている。登場人物は、魚、漁師、女房である。魚は魔法で姿を変えられた元王子だと言う。漁師は、もともとは、浜辺の洞穴に住んでいたのだが、欲望の行方は、家、煉瓦の家、華族、王様、そして最後に「お日様やお月様をこしらえた、神様」を望んで、元に戻る。海や天候に関しては最後に、まとめて描写している。

【え】の訳者の木村小舟(1881—1951)は小波の一番弟子である。「少年世界」にも数多く執筆している。登場人物は、きれいな魚、漁夫、女房である。欲望の行方は、まずはじめに洞穴に住んでいた、小さくても一軒の家、レンガ造りの家、華族、皇后様、世界一の王様、そして最後に日、月を支配する神様。望みを告げに行くたびに海がだんだん荒れてゆく描写がある。お伽教材なので、欄外に「漁夫はつり上げた魚をどうしたか」「女房は

漁夫に向つて何と云つたか」「女房はどんなことを漁夫にたのんだか」などが書かれており、子どもたちに質問が出来るようになっていいる。

II. プーシキン「金の魚」系

ここには、作者がプーシキンと思われるものを集めた。全部で三話ある。【お】 嵯峨のや主人(お室)「漁夫と魚との童物語」「家庭雑誌」明治二十六年十二月【か】 佐伯氏「漁夫物語」、「女鑑」明治三十五年三月【き】 寺谷大波訳「黄金の魚」(世界お伽噺第三編)大日本国民中学会、明治四十一年十一月で、【お】と【か】は、プーシキンと明記されている。また【お】の「家庭雑誌」と【か】の「女鑑」は、今まで見てきた話が収められていた本や雑誌と異なり、婦人啓蒙雑誌である。

【お】は小説家であり、詩人でもあった本名矢崎鎮四郎(1883—1947)による。東京外語露語科を卒業しているため、ロシア語からの翻訳であろう。⁽¹⁶⁾ 原典どおりに、詩形式で翻訳されている。例えば、最後の場面も次のように訳している。「見れば王宮影もなし。／壊れかかりた白屋が、／昔のままに荒てあり、／床には彼の婆様が、／昔のままのつづれ着て、／しょんぼりとして居たりけり」。登場人物は、金の魚、お爺さん、お婆さんである。だんだん変わって行く海も描かれる。始めは、海辺の白屋に住んでおり、欲望の行方は、新しい着物、家、お金持ちの奥方様、天下の女帝、そして最後は海の主を望み、元に戻つ

てしまう。

【か】は「女鑑」に収められている。登場人物は、金魚、お爺さん、お婆さんである。ほぼ原典どおりであるが、散文で書かれている。初めは「不潔な土小屋」だが、欲望の行方は、麦粉、家、華族様の奥様、王様、そして最後に海の王を望み元に戻ってしまふ。

【き】は、寺谷大波の『黄金こがねの魚』である。登場人物は、金色の五寸くらいの魚、七十近いお爺さん、憎体なお婆さんで、海の描写がある。実は龍宮の女王だから助けて欲しいと話す。初め「露西亞のある海岸」の小屋であったのが、欲望の行方は、水瓶、広い家屋（石造り）、貴族、大王、最後に海の大王を望み、元に戻ってしまふ。

その他、昭和九年の翻訳だが、プーシキンの翻訳と思われるものがある。梅田寛の『童話童書讀本「世界」』では「金色のお魚」と題されている。この本の扉の推薦に、口演童話家であった岸邊福雄（1873-1958）と久留島武彦（1874-1960）の名前がある。口演童話との接点が考えられる資料でもある。

Ⅲ. グリム「金の子ども」系

また大島廣志「近代における外国昔話の受容」では、「幼年世界」の西村渚山「金の魚」⁽¹⁷⁾の系統の翻訳もあると指摘している。これは、グリムの「金の子ども」(KHM八五)という話だ。「金の子ども」は、話の前半が「漁師とその妻」や「金の魚」にと

ても似ている。まずグリム童話の話の梗概を示したい。

漁師が、網の金の魚に逃がしてくれたら、豪華な屋敷と料理が入っている戸棚を上げるが誰にも話してはならないと言われ、その通りになる。妻に理由を話すとすべて消える。また金の魚がかかり、同じことが起こる。三度目にも金の魚が捕まったので、今度は魚は自分を六つに切つて、二つは妻に、二つは馬にやり、二つは地面に植えろと言う。その通りにすると、妻は金の子どもを二人産み、馬は金の馬を二頭産み、地面から金のユリが二本生える。

子どもたちは、成長すると世の中に出て行きたがり、一人は途中で家に帰るが、もう一人は金の馬に乗って出掛けて結婚もする。しかし家のユリが倒れたので、家を出た子どもの身に危険が迫ったことをしり、家に残ったもう一人が馬に乗り駆けつけ、助け出す。

後半はまったく異なる話になってしまうが、この話は、以下の四話が翻訳されている。【く】西村渚山「金の魚」幼年世界「第一卷第十四号」博文館、明治三十三年十二月【け】寺谷大波「二人兄弟」『世界お伽噺第十篇』大日本国民中学会、明治四十一年【こ】和田垣謙三・星野久成訳「黄金丸」『グリム原著 家庭お伽噺』小川尚榮堂、明治四十二年【さ】巖谷小波「黄金の魚」『教訓お伽噺』博文館、明治四十四年、である。

【く】や【け】はグリムにほとんど忠実に訳している。一方【こ】や【さ】では、妻ではなく近所の人に理由を聞かれる。近所の

人たちは、漁師を大泥棒と責め、王様に裁判してもらおうと言うので、仕方なく話す形に翻案されている。後半は、ただ二人の子どもが金の馬に乗り出かけ色々な宝物を持って帰ってくるというようになり簡略化される。子ども二人がいかに冒険したかという話ではなく、話の前半に重きが置かれ、魚の報恩により幸せがもたらされるといふ単純な形に変化している。【こ】は文末に、解説の「こんな小さな魚でも生命を助けられた恩を忘れません、まして人は恩人の為に尽くさねばなりません。又小さな者や弱い者と見れば善く、憐れんで其依頼を聞入れてやるが宜い、そうすると自然にまた其応報が廻つて来るものです。」という言葉が添えられ、報恩の大切さ、また小さきものを助けるよう説いている。【さ】も最後に漁夫は世界一のお金持ちになったとしている。

以上三つの話が明治時代に訳されて、紹介されていることを確認した。⁽¹⁸⁾

第三節 日本の口承資料

それでは、『日本昔話大成』、『日本昔話通観』、大島廣志「近代における外国昔話の受容」⁽¹⁹⁾の先行研究を踏まえ、管見の限り集めた十三話の口承資料を内容で整理してみたい。一覧を文末に付した。『日本昔話大成』では、補遺十番に「金の魚」と題され、報告例は一話のみである。注では、「グリムの『漁夫とその女房』

(二九)にきわめて近い。あるいはこの話の記憶にもとづくものではなからうか。」と指摘されている。資料は内容的に大きく二つに分けた。前者は、I. グリムの「漁師とその妻」やII. プーシキンの「金の魚」に近い、A. 元のもくあみになってしまふ話である。後者は魚の報恩により、B. ハッピーエンドになる話である。それぞれの内容を検討したい。また文末に口承資料の一覧表を付した。

A. 元のもくあみ

a. グリムの「漁師とその妻」系

まず、グリムの「漁師とその妻」に似ている話は四話ある。①は新潟県の小川ハルさんによるもので、題は「漁師とその妻」とつけられている。魚はタイで「海の王様」と語られる。グリムでは魚はヒラメであるが、魔法をかけられた王子と話すところから、海の王様になったのだろうか。そして、貧乏な漁師である「じさ」と「おろく」という名の「ばさ」が登場する。欲望の行方は、「身上よくらくらく食われるように」から始まり、いい家、最後に「お天道様が東から西へはいるのをあべこべにする」ことを願ひ、すべてを失ひ元通りになってしまう。この話に対して、編者である水沢謙一は解説の中で、「グリム童話にもある『漁師とその妻』と、同じ一つの型の昔話です。本話の語り手、小川ハルばあさんが、子どもの日に、文化生まれの祖母から、いろいろばたで聞いた話で、日本にも古くから伝承していた。全国的にも越後的にも、本話の分布は、きわめてまれ。

越後に教話あるだけ。」と述べている。しかし、「日本にも古くから伝承していた」かどうかについては、それは少々疑わしい。前述の明治期の翻訳で、橋本青雨訳の「漁師の妻」(Iの【い】)の中で、次のような魚に呼びかける言葉がでてくる。「申し、申し、海の人！／聞いて下さい、現はれて！／女房のお六がせがむ故／御願申しに来たことを！」一方この新潟の昔話では、「もし、もし、海の人、きいてください、あらわれて、女房おろくがせめる」と語られる。多少異なるが、内容は勿論、女房の名前まで同じである。これは両者に大きな関係があると言えるだろう。

次は、②埼玉県の「漁師の女房」と題された話である。鈴木棠三・山田勝利『川越地方昔話集』に入らず、柳田が「グリム？」と朱書きしている話だ。学生である間中芳枝さんが報告している。登場人物は、ある国の王子だという魚、漁師、そして妻である。欲望の行方は、始め浜辺の洞穴に住んでいたの、家を望み、華族、王様、そして最後に神様になりたいと望む。この話の特徴は、巖谷小波の「漁師の女房」(Iの【う】)にそっくりだということである。まず、題も同じだ。またグリムのように望みを言う度に徐々に天候が悪くなるのと異なり、この話では、「この間から女房のお使で漁師が浜へ来る度に天気は段々悪くなつていきましたがこの時はもう雷が鳴つて、雨が降つておそろしい天気になつて居りました。」と最後にまとめて表現している。小波も「此間から女房のお使で、漁師が濱邊え来る度

に、天気わ段々悪くなつて居ましたが、此時わもう雷が鳴つて、雨が降つて、恐ろしい天気になつて居りました。」と最後にまとめて書く形をとっている。表記が違うが、ほとんど一語一句そのままである。ここの部分だけでない、細かい部分が異なることもあるが、ほぼ全体が小波の「漁師の女房」と同じである。話としての唯一の違いは、小波の翻訳では、木の家を望んだあとに煉瓦の家を望むが、この話では煉瓦の家が省略されているということくらいだ。とても記憶力がよく、この話を聞いたのか読んだのかでほとんど覚えてしまったのか、あるいは宿題に困って『明治少女節用』を参考に書いたのかのどちらかであろう。ただどちらにしても、お話として、小波が訳した話が子どもに受容されていることが分かる例ではないだろうか。そして、柳田の「グリム？」という朱書きは正しいと言えるだろう。

③長野県の話は、「魚の恩返し」と題されており、登場人物は、海の主、漁師、おかみさんである。欲望の行方は、あばら屋だったので、いい家、小判がたくさん、殿様、そして最後に雨が降らないようにと望む。「申し、申し、海の人」と繰り返し呼びかけているが、これは①の新潟の昔話と同様で、橋本青雨の翻訳が関係していると考えられる。話の教訓として、最後に「それで、欲もいっかげんに程度にしておかないと、そういうことになる。こうゆう話。」と解釈している。

④鳥取県の「あんまり欲張るな」の登場人物は、大きな平目、漁師のおとうさん、妻のイサベラである。グリムでもヒラメで

あるし、妻の名前もイルゼビルと似ている。また願いを言うことに悪化する天候が語られているのも特徴的である。欲望の行方は、貧しい漁師から、金持ち、御殿、そして最後に妃を望んで、元に戻ってしまう。しかし、妻のイサベラが改心する場面があるのがグリムと異なる。この話も欲張ってはいけないという教訓が最後につく。話者の木田信子さんは、この他にグリムを二話、「ヘンゼルとグレーテル」(KHM一五)や「知恵のある百姓娘」(KHM九四)を語っている。編者の小倉広重「あとがき」によると、話者の父や兄が読書好きでこの二人から話を聞いている。兄は本で読んだ話を近所の子どもに話して聞かせるのが好きだったという。どの翻訳の影響が見られるかはまだ分からないが、グリムの翻訳による影響があると言えるだろう。杉浦邦子「『グリムの昔話から・2』によせて」⁽²⁰⁾においても、木田信子さんの語るグリム三話が考察されている。「ヘンゼルとグレーテル」など他の二話と比べて、この話は原作に近いなどの指摘がなされている。

以上四話を見てきたが、橋本青雨や巖谷小波の翻訳などグリムの翻訳の影響を受けていることが分かる。

b. プーシキン系(魚が金の魚や、綺麗な魚)

⑤秋田県の「金の鯛」の発端は、一度放してやると、翌日また網にかかり、網にかかる度ごとに願いを叶えてくれる。欲望の行方は、小屋だったので、大きい家、物置を望み、最後に海

の主と変わって行く。しかし、望みはお爺さん自身が述べており、最後の叶わぬ願いは、お婆さんが願う。お爺さんが魚に伝えると、次の日にお婆さんを連れて来いと言う。魚はお婆さんを海に誘ってそれっきりになった。このように、お婆さんだけに制裁が加えられている。プーシキンと比べると、魚が金色であることは同じだが、望みの数も少なく単純になっている。妻が望みを言い続けるだけなのに、お爺さんもすべてを失う原作よりも、魚の恩返しの要素が強く出ていると考えられる。

⑥埼玉県大宮市の「よくばり損」は柳田によって「グリム? コノ話多シ理由アルカ或ハ日本ノ話カ」の朱書きが冒頭に付され、最後に「之は先に十位の時お隣のお祖母さんに聞きました。」と書かれている。魚は金色の魚で、欲望の行方は、明日の米、家、大金持ち、大勢の召使、女殿様、そして最後に海の大將と移り変わって行く。内容は、お爺さんが働かされ、お婆さんが威張るところなど、プーシキンの話によく似ている。また原作ではおじいさんがこき使われるように描かれるのに対して、こちらの話は、「まじめなちいさんは大金持になるよりも下男の方がましだと思つてゐた」と語られる。

⑦埼玉県所沢市の「よくふかばあさん」は「冬季宿題昔話採集」と「所沢町にて母よりきく」と書かれている。また柳田により「グリムニアル話」と書かれている。欲望の行方は、家を立派に、お金も有り余るほど、女殿様、そして最後に女王を望む。全体的に話も短く簡略化されている。ただ、魚が金色であることや、

召使や、大勢の人をつかっているという表現が出てくることから、プーシキンの話に似ているといえる。

⑧長崎県の「金の魚」の欲望の行方は、家、御殿のようなもつとよい家、最後にさらにもつとよい家である。望みは終始、家に関してのみで三度目に「金の魚が今度ア怒って何ともいわぢ水ん中へ入って行」き、元に戻る。そして、「あんまりお前が欲張り過ぎるけん、こげんなつてしようた」、「あんまり今まで遊うでおったけん、これから二人で一生懸命働こうだい」と二人は反省し、「二人はよく働くこつなつたげなもんノマイ。ソリバツカシ。」と結ぶ。

⑨宮城県の「魚の報恩」、「魚と愚かな婆」は、佐々木徳夫「宮城ざつと昔八」と、『多賀城市史 三民俗・文学』に収録されている。話者の佐々木達代さんは、仙台生まれで、本吉郡南三陸町から後に、多賀城市に引っ越しをしている。編者の義母にあたり、祖父から沢山の昔話や世間話、伝説を聞いたとい⁽²⁾う。魚が、あまり綺麗なので爺が放すと、婆が惜しい、明日釣つて来いと言う。欲望の行方は、願いが三つに限定されており、隙間風の入らない家、立派な家、奉公人である。しかし、奉公人を養うのは大変だからこんな家要らないと言ひ、また魚に頼むと元に戻る。魚が尻尾で海の水を三回バシヤバシヤすると叶う。三つの願いといひ、三が二回も出てくる。

以上、綺麗な魚という表現を含めて、「金の魚」といった、プーシキン系の話は五話あった。グリム系の話では呼びかけが明治

期の翻訳と昔話が共通していたが、プーシキン系の話では、もともとないため、特別の表現はないようだ。またプーシキンの話の影響を受けていると考えられるものは、原作にあるように奉公人、召使、家来が語られる傾向にある。

c. その他

⑩新潟県東蒲原郡上川村の「洞穴生活」は、話者である女性Tさんが、題をつけ、講談好きの父から聞いたそうだ。Tさんが語った他の昔話は「米埋糠埋」「牛方山姥」「猫檀家」「猿婿入り」などであり、一回目の調査では論者が聞き取りに行っている。「洞穴生活」は四回目の調査のときに語られた話で、約三十分にも及ぶ豊かな語り口の話である。足腰がいたいかあちゃんののために、カルシウム不足だからととうちゃんが釣りに通うのが発端。釣り糸を垂れると、魚の影が近づいてくる。それがすつと人の形になり水面から現れ、海の女だという。そして、釣りの理由を聞き、望みのものをあげるとい⁽²⁾う。欲望の行方は、洞穴生活だったので、立派な家と御馳走、立派な布団、子ども、最後に日没を延ばしてほしいと望むが元に戻ってしまう。特徴としては、男の子が生まれた後、殿様にどこから金を盗んで来て家を建てたのかと尋ねられる点である。海の女から、話してはいけないというタブーを課されている。そのため、人には話せないが悪事は働いていない、殿様は俺以上だから聞かないでくれという、殿様は納得する。この殿様が出てくるのは少し

唐突のようだが、グリムの「金の子ども」系の翻訳の和田垣謙三・星野久成(Ⅲの【こ】)や、巖谷小波(Ⅲの【さ】)の訳でも、急に金持ちになって泥棒を働いたのかと王様に疑いを掛けられる部分が出てくる。これはグリムの原作には出てこない翻案であるが、この話には入ってきている。また最後に日没を延ばしたい理由だが、炭焼きをもう少し出来るようにという働き者の理由からで、その上かあちゃんが、とうちゃんに望みすぎだと止める。今まで女性が欲をかく側に立っていたが、止める方に回っている。そして、最後に、「欲たがんなよ、限度あるんだぞ。ごはんよっぱら食べさせてもらって、暖かい布団さ寝せてもらえれば、それ以上望むなよ。」と話者は話す。限度なしに望むとんでもないことになるかと父に言われたとのことだ。カルシウムが出てきたり、洞穴生活では子どもも育たないだろうと過去に中絶をしたことを海の女に叱られたり、リアルで教訓的でもある。グリムやプーシキン通りではない何か、お芝居や講談など、大きく翻案されたものがこの語りに影響を与えているだろう興味深い例である。

B. ハッピーエンド

それでは次に、今までのように元のもくあみになってしまう話ではなく、ハッピーエンドで語られる話をみてゆこう。

⑪群馬県の「金の魚」は、当時小学校五年生の鈴木幸雄君が、おばあさんから聞いた筆記による。登場人物は、金の魚、お爺、

お婆である。山の小川で大きな金の魚を釣る。海ではないのがグリムやプーシキンと異なる。何も貰わない爺は、婆に怒られ家から追い出される。魚に話すと、爺を助けるべくお金を授けてくれ、それでめでたく話は終わる。金びかである超自然的な存在である魚とその魚による報恩という形で語られている。

⑫福岡県の「釘打ち地蔵」の登場人物は、大鯛、貧乏だが親孝行の三兵衛、その母である。捕まえた鯛に「母に腹いっぱい食べさせられるよう、米と倉がほしい」と話す。ここまでは、今までの話と同じであるが、鯛は「地蔵の背に大釘をさして『米と倉を下さい』と言えばよい」と教える。そのとおりになり、母は親孝行だから神様が褒美をくれたといい、母の病氣も治り、幸せに暮らし、貧乏人を助ける。

⑬佐賀県の「金魚の恩返し」の話者の蒲原タツエさんは、他に小川未明の「赤い蠟燭と人魚」と思われる「赤い蠟燭」も語っている。捕まえた金魚が、海の底で母が大病にかかっているのを命を助けてほしいと言い、「シャンシャンシャン」と三回手を叩いて呼んだら願いをきく。願っても、家に帰ると米びつ一杯の米、小さくて雨漏りのする家なので、家を直して欲しいという二つだけであった。しかも、二度目の願いでは、「金魚よ。金魚よ。こないだお米を沢山有難う。本当に長生きした思いをした。有難う。」といってお礼を言ってから頼みごとをする。家も綺麗になり二人は裕福になって仲良く暮らした。このように、めでたく話は終わっている。

これらの話は三話だけであるが、魚も、金の魚や大きな鯛で、元のもくあみの話と変わらない。主人公も心の優しい性格で、魚を助ければよいことが起きるといふ、魚による報恩が強調されている。

おわりに

グリムやプーシキンの原作、明治期の翻訳、そして如何に昔話として語られているかを見てきた。明治期の翻訳と昔話に共通して、漁師の夫婦が住んでいたのが、洞穴という話が幾つかある。これは原作にはないもので、明治期の翻訳が口承資料に影響を与えていることが伺える。また橋本青雨の訳【い】と新潟①の昔話の婆の名前が「おろく」で共通している。更に、巖谷小波の訳【う】と埼玉②の昔話は、ほとんどそっくりである。そして長野③の昔話でも、橋本青雨の訳の魚に呼びかける言葉は同じだ。以上のように、明治期の翻訳が、昔話に影響を与えたことが分かるが、中でも橋本青雨【い】と巖谷小波【う】の訳が元になっていると言える。

また「金の子ども」では、魚に口止めされるのに、明治期の翻訳では巖谷小波の訳など二話【こ】【さ】が、近所の人たちに泥棒と疑われ王様に言いつけると責められる場面が翻案で加わっている。これも、殿様がやってきて金持ちになった理由を問いただす、新潟⑩の話に影響が見られる。鳥取⑪の話も、妻

の名前がイサベラで原作に似ている。

次に話の内容であるが、欲張り婆という話の形、そして欲張ってはいけないという教訓は、日本でも受け入れる土壌がある。しかし、動物報恩を重視するためか、昔話の型であるATU五五五を四つに分けたうちのⅢ欲望の行方、Ⅳ元のもくあみが欠如し、ハッピーエンドになる話もいくつか存在している。日本で昔話として語られる話が少ないのは、単なる報恩譚で終わらない、この皮肉な結末が受け入れにくかったのかもしれない。

注

- (1) 野村純一編『柳田國男未採択昔話聚稿』二〇〇二 瑞木書房
- (2) 大島廣志「近代における外国昔話の受容」『昔話—研究と資料—』三十一 二〇〇三 日本昔話学会
- (3) Hans-Jörg Uther "The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography" Helsinki: Academia Scientiarum Fennica 2004
- (4) ハインツ・レレケ(小澤俊夫訳)『グリム兄弟のメルヒェン』一九九〇 岩波書店、相沢博「グリム童話『漁師とその妻の話』」東京大学教養学部『外国文学研究紀要』十八—八 一九七〇 参照。
- (5) 大島廣志「外来昔話としての『継子の苺拾い』」野村純一編『伝承文学研究の方法』二〇〇五 岩田書院

(6) A. プーシキン作(みやこうせい訳)『金の魚』二〇〇四

未知社。以下、金の魚の話は、本書より引用。最後の、「壊れた桶のそばに残る」というこの言葉は、ロシアでは「一炊の夢、もとのもくあみ」という意味の諺にもなった。

北垣信行・栗原成郎訳『プーシキン全集三』一九七二
河出書房新社 参照。

(7) 大友文氏にご教示いただいた。

(8) 『少年世界』の増刊号『お伽共進会』明治四十年(一九〇七)六月

(9) 『少年世界』二十四—一 大正七年(一九一八)

(10) 『少年世界』二一六 明治二十九年(一九八六)

(11) 野口芳子『グリムのメルヒェン その夢と現実』一九九四
勁草書房

(12) 川戸道昭、野口芳子、榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』二〇〇〇 ナダ出版センター 所収

(13) 須田康之『グリム童話〈受容〉の社会学』二〇〇三 東洋館出版社

(14) 奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話』二〇〇五 世界思想社

(15) 『口承文芸研究』二十八号 二〇〇五 日本口承文藝學會
(16) 大阪国際児童文学館編『児童文学大事典』一九九三 大日本図書

(17) 『幼年世界』第一卷第十四号 明治三十三年(一九〇〇)

十二月

(18) 明治期の翻訳を採すにあたり、藤本芳則「巖谷小波お伽作品目録稿」一九九二 私家版、川戸道昭、榊原貴教編『明治翻訳文学全集三十六プーシキン／レールモンツフ集』一九九九 大空社、川戸道昭、野口芳子、榊原貴教『日本におけるグリム童話翻訳書誌』二〇〇〇 ナダ出版センター、川戸道昭、榊原貴教編『児童文学翻訳作品総覧 第四卷』『フランス・ドイツ編』二二〇〇五 大空社、を参照した。また巖谷小波の資料については、前田陽子氏にご教示いただいた。

(19) 大島廣志「近代における外国昔話の受容」『昔話—研究と資料—』三十一号 二〇〇三 日本昔話学会

(20) 乾侑美子『語りの文化シリーズ・3 グリムの昔話から 2—語る人のために—』一九九一 語り手たちの会

(21) 「ざっと昔」の資料の確認が出来ず、佐々木徳夫氏に伺ったところ、同じ話者によって語られているということが分かり、話者の情報もご教示いただいた。

(くぼ・かよ／國學院大學大学院)

日本における「金の魚」「魚報恩」の口承資料一覧

話者住所 集場所	題	型	登場人物	内容	希望の行方、備考	語り手(報告者)	出典
① 新潟県南蒲原郡 栄村浦新田	「漁師と その妻」	A	タノ(海の王様) 貧乏な漁師 ばさ(女房おろく)	×最後に聞いてもらえなかった願い	○ハッピーエント	小川ハル64歳(S52) 子どもの頃、文化(生まれの祖母から)	※原典に当たれなかった資料 水沢謙一編『採村誌』栄村誌編さん委員会、1982年
② 埼玉県川越市?	「漁師の 女房」	A	魚(ある国の王付) 漁師 妻	浜辺の刺々 家→華族→王様 → ×神様 「涙へ来る度と昔は段々悪くなった」「 ・ケリム? と昔かれています」	二年×組 間中芳枝	鈴木栄三・山田勝利『川越地方昔話集』 (野村純一編『柳田國男未採求昔話集』 編) 福木書房、2002年) 所収)	
③ 長野県上伊那郡 中川村南山方大 草	「魚の恩 返し」	A	海の主 漁師 おばあさん	あばら屋、いい家→小羽がたぐさん→艘様→ 「それで、欲しいいかなげんに程度にしておかないと、そうゆうことにな る。 こうゆう話」	長谷川久雄	鈴木栄三・山田勝利『川越地方昔話集』 (野村純一編『柳田國男未採求昔話集』 編) 福木書房、2002年) 所収)	
④ 鳥取県八頭郡若 鳥町(鳥取市気 高町浜出出所)	「あんま りあたる な」	A	大きな平目 お父さん イナベラ	貧しい漁師の家。金持ち→御殿→ ×妃 海や嵐の描写あり。イナベラも反省して貧しい漁師に満足する。	木田信子 (M38年)	小倉広重『キスカーこころのたまごこ し』自刊、1984年	
⑤ 秋田県男鹿市戸 賀塩戸	「金の鯛」	A	金の鯛 おばあさん	小屋 大きい魚が、おばあさん運んで来いと言いい、 魚はおばあさんを海に誘ってそれっきりになった。	三浦くら80歳	今村義孝・泰子編『秋田むかしこ第二 集』未来社、1968年	
⑥ 埼玉県大宮市 (北足立郡馬宮 村)	「よくば り損」	A	金色の魚 おじいさん おばあさん	明日の米→家→大金持ち、大勢の召使→女殿様 → ×海の大神 ・おじいさんは下男になって働く方がいい、魚への呼びかけあり。 ・ケリム? コノ話多ク理由アルカ成り日本ノ話カの未書きあり。	二学年二組4荒井良子 十二月三十一日〔十位 のお隣のお祖母さんか ら〕	鈴木栄三・山田勝利『川越地方昔話集』 (野村純一編『柳田國男未採求昔話集』 編) 福木書房、2002年) 所収)	
⑦ 埼玉県所沢市	「よくふか かばあさ ん」	A	金の魚 漁師のおじいさん 漁師のおばあさん	家を立派にしお金も有り余るほど→女殿様 → ×女王	第二学年 吉田紀久子 (野村純一編『母よりき く])	鈴木栄三・山田勝利『川越地方昔話集』 (野村純一編『柳田國男未採求昔話集』 編) 所収)	
⑧ 長野県北茅渚郡	「金の魚」	A	金の魚 お婆さん	家(着物も) → もつとよい家(御殿のよう) → ×さらにもつとよい家 ・魚への呼びかけあり。 ・欲張りを改めい、二人で一生懸命こうと話す夫婦。	結城次郎	『肥前国北高来郡昔話集』國學院大學方 言研究会、1989年 ※原典にはあられ ず、『日本昔話大成』に載る本文を参照。	
⑨ 宮城県本吉郡南 三陸町志津川十 日町	「魚の報 恩」	A	大した綺麗な魚 釣りの好きな爺 婆	〔三つの鯛い〕 閉居風の知らない家、(お成のような)、奉公人 奉公人の共業は大勢、ごん家要らないと、魚に頼んで元に戻る。 ・ハバハバと手を叩き呼ぶ。魚が尻尾で三回ハバハバヤヤすると叫ぶ。	佐々木運代 (M36年)	『宮城ざつと昔』81 佐々木徳夫(みちの く昔話研究会、1979年3月)、『多賀城 市史』3 民俗・文学』多賀城市史編 纂委員会、1986年	
⑩ 新潟県北蒲原郡 上川村日野川小 杉	「酒穴生 活」	A	海の女 おちやん かあちゃん	洞窟。立派な家と御殿走→和団→子ども×日没を伸ばしてほしい ・カランズ家と足がからとどうちやんが釣りに。 ・殿様にとどこから金を盗んで来て家を建てたのかと言われる。	長谷川ツイ (T12生) (講談好きの父から)	佐々木・土師)『チーア』番号1-1、 2002年3月25日録音	
⑪ 群馬県沼田市	「金の魚」	B	金の魚 お婆	○山の小川で大きな魚を釣り逃がす。婆が怒って爺を追い出す。魚に話 からは二人仲よく暮らした。	赤城根村南郷小学校五 年生鈴木幸雄(沼口町 にてでている祖母から)	佐田茂『群馬県利根郡昔話』 (野村純一編『柳田國男未採求昔話集』 編) 福木書房、2002年) 所収)	
⑫ 福岡県福岡市東 区馬出山町	「釘打ち 地蔵」	B	大層だが親孝行の 三兵衛	○「母に腹いっさいいぢやせられよう、米と倉がほしいい。 鯛は、地蔵の背に大釘をさして「米と倉を下さよ」と言えばよい」と教 える。 母の病氣も治り、幸せに暮らし、貧乏人を助けた。	丸山ハツ71歳(S21 〜20)	樽垣元吉『福岡県民話集』教智社、1971 年	
⑬ 佐賀県杵島郡有 明町明生	「金の魚の 恩返し」	B	金ぴかかな赤い金魚 お爺さん お婆さん	○小さい家。母が強で命をいにする魚。シヤンシヤンと三回手を叩 いて呼ぶ。家に帰ると米びつ一杯の米(お礼を言う) →小さくて雨漏り のする家なので、直して欲しい。 精福に仲良く暮らす。	浦原タツエ (T5生)	宮地武彦『水ぐるま』三弥井書店、 1991年	